

1・2区の調査概要

集落域の南東辺にあたる1区では、調査面積が25㎡と小規模な調査でしたが、中世から近世にかけての柱穴・ピット・溝・木杭群などを確認しました。集落域の中央部にあたる2区では、主に中世（鎌倉時代～室町時代）の柱穴・ピット・井戸・土坑・区画溝・竪穴状土坑、近世（江戸時代）の水路などを確認しました（写真⑩）。重複する柱穴が多く見られるため、掘立柱建物などの建物が複数存在したと考えられます。中世の井戸は全部で5基確認しましたが、井戸側材が残るものはなく、すべて素掘りの井戸でした（写真⑧）。

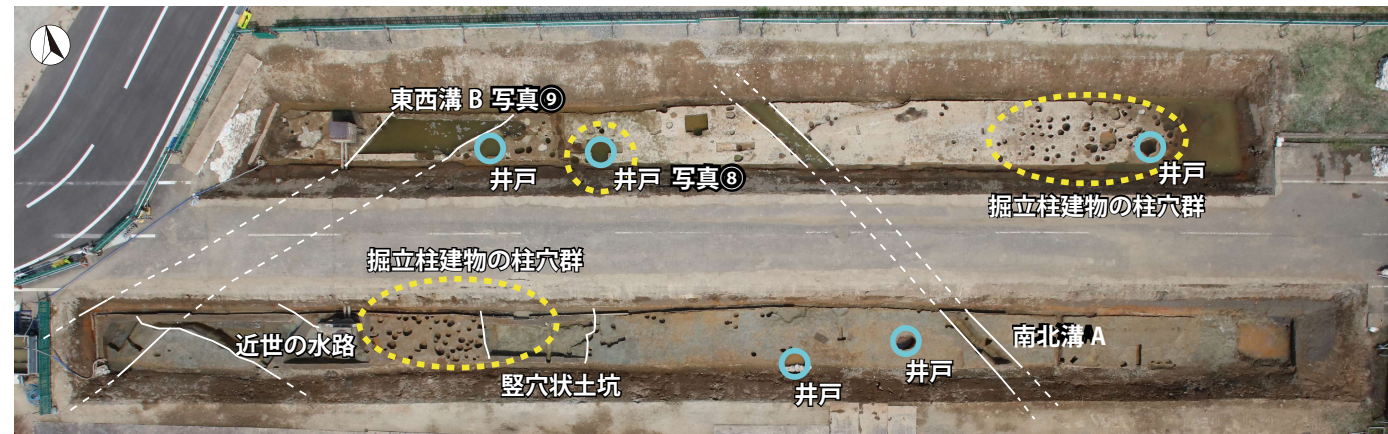
この他、2区の中央部で幅約1.7m、深さ約1mの鎌倉時代の南北溝A（写真⑩）、西端で幅4m、深さ約1mを超える室町時代の東西溝B（写真⑨・⑩）を確認しました。このうち東西溝Bは、これまでの調査で確認されている室町時代の方形区画溝（最大幅4.5m、深さ1.3m、総延長約150m）に接続するため、屋敷地を方形状に囲む区画溝の一部と考えられます。区画溝は今回の調査区の外側（西側）にまで連続していることから、これまで推定されてきた以上に、より広範囲に中世の屋敷地群が展開していた可能性が考えられます。



●写真⑧ 中世の素掘りの井戸



●写真⑨ 室町時代の東西溝B



●写真⑩ 1・2区全景

今回の調査で出土した遺物

今回の調査では、主に丘江遺跡の中世～近世集落で活動した人々が使用した日常の土器・陶磁器、石製品、木製品、銭貨などが出土しました。

2区では、土師器杯（写真⑪-3）、珠洲焼の片口鉢（同-1）、古瀬戸の香炉（同-5）、漆器椀、砥石などが出土しました。3区では、土師器皿（同-2）、中国産の青磁碗（同-4）、唐津焼皿（同-6）などが出土しました。東海地方や九州地方等の窯で焼かれた陶磁器が丘江遺跡の集落に運ばれたことがわかります。また中国産の青磁碗もあります。

このほか、3区から出土したものに「洪武通寶」（同-8）があります。中国明王朝の洪武帝の時代、1368年（応安元年：日本の元号）に発行が開始されたもので、室町時代の日本で渡来銭として広く流通したものです。なお、近世（江戸時代）の水路から木簡（同-7）が出土しました。



1: 珠洲焼片口鉢（室町時代） 2: 土師器皿（鎌倉時代）
3: 土師器杯（平安時代） 4: 中国産青磁碗（鎌倉時代）
5: 古瀬戸香炉（室町時代） 6: 唐津焼皿（安土・桃山時代）
7: 木簡（判読不明: 赤外線写真） 8: 銭貨 洪武通寶（室町時代）

●写真⑪ 今回の調査で出土した遺物



かしわざき

柏崎市

おかえ

丘江遺跡 (13 次) 現地説明会資料

日時：令和7年（2025年）11月8日（土）

場所：柏崎市田塚三丁目 丘江遺跡発掘調査事務所

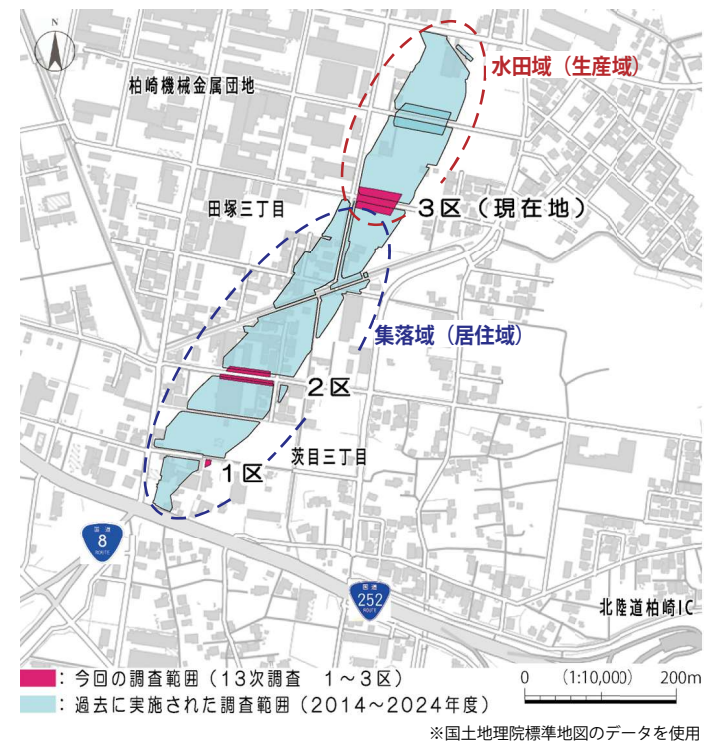
主催：公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

丘江遺跡の概要

丘江遺跡は柏崎平野の中央西寄り、鯖石川左岸の標高約6～7mに広がる主に中世（鎌倉～安土桃山時代：13世紀～16世紀末）の集落・生産遺跡（幅約80m×長さ約750m）です。

発掘調査は国道8号柏崎バイパス建設に伴い、2014年度から現在に至るまでほぼ継続して行ってきました。約10年に及ぶ調査の結果、遺跡の南側は掘立柱建物や区画溝・井戸・土坑などが分布する集落域（居住域）、一方の北側は、水田が広がる生産域であることが分かってきました（右図）。なお、遺跡の北側では、中世以前の古代の遺構や弥生時代後期（約1,800～2,100年前）の遺構・遺物も見つかっています。

今回の13次調査では、南側の集落域で2箇所（1・2区）、北側の水田域で1箇所（3区）の計3箇所（約2,700㎡）で調査を実施しました。その結果、1・2区において鎌倉時代から室町時代を中心とした建物跡・井戸・区画溝・土坑などが、3区では鎌倉時代から安土桃山時代にかけての水田や畠跡、平安時代の建物などが見つかりました。



●丘江遺跡の範囲と今回の調査区（1～3区）



●丘江遺跡の遠景写真（北東から撮影） ※1・2区は調査終了後に埋め戻し済